ガーデナー建築家として
建築と庭と植物のすべてを理解し、
建物の内・外を総合的に設計する勝田無一さん。
空の下の自在空間を充実させるために
エクステリアをどう取り込んで
家族が楽しくくつろげる場をつくればいいか
そのアイデアを教えていただきます。

家に庭を取り込んだインナーテラスガーデン。限られた造園スペースを立体的に確保し、庭とテラスを一体化させて広さを演出。

「庭は外の部屋」だから 塀で囲い、のびのびと暮らしたい

勝田 無一

パパイヤが実をつける楽しい対面キッチン。ガラス折り戸を開けると、キッチンは温室と一体化します。

２層の高さで庭ごと囲い込むプライベートシェルターは、風と光は通しても視線は遮断。庭にもうひとつ「外の部屋」をつくり出しています。

庭の緑を楽しめる半戸外の土間。家の「中」と「外」の空気が同化し、不思議な一体感が。

外壁を塀にした建物。道路側からはシンプルな箱形建築で、内側に楽しいプライベートガーデンがあるとは思えません。

日本人は建物だけでなく「エリア」で生活していた

住宅と庭を設計して 35 年。いつごろからか、世の中の住宅が自分の考えと違うことに気づきました。なぜだろうと思い、庭と人間の生活史を考えるにつれ、私なりの結論に行き着きました。

そのキーワードが「塀とフェンス」「庭とガーデニング」です。それぞれがどう違うかに、大きな意味が隠されています。

昔の農家を思い浮かべてください。縁側ですいかを食べたり、柿を干したりできる、外と内が開放的につながった建物。

もともと日本の農家は、南向きの広い前庭があってそこで農作業をし、縁側を通して農作物を選別したりしていました。前庭の先には農道、北には常緑の防風林、西には西日を防ぐシラガシなどの高垣があり、建物の中だけでなく「エリア」で生活していました。

で、近所の人が前の道を歩いていると、「お茶飲んでいきなよ」と声をかけ、村の情報交換をしたりする。少し前までの日本人は、こういう内と外とのあいまいな生活が普通だったのです。

日本の「塀」と欧米の「フェンス」の違い

それが戦後の高度成長で、農地はベッドタウンとしてどんどん開発されました。前の農道はバス道路に、農家の庭は分譲して住宅に。そして道路を近所の人でなくよそ者が歩きはじめると、プライバシーを守る必要が生じ、塀を立てるようになりました。

農村が街になることで、「塀」が発生してきたのです。

一方、欧米の住宅には、日本のような塀はなく、あっても中の庭や建物が見通せるフェンス程度。建物は窓もドアも頑丈で建物自体で完結し、エリアでなくインナーでがっちりガードして生活しています。欧米では個人と社会が対峙しているのです。

そして、いま日本でつくられている新興住宅地の住宅は、大半がこの欧米式になっていて、塀がありません。たしかに猫の額みたいな狭い庭をブロック塀で囲っても日陰になってうっとうしいだけ。それならば塀じゃなくフェンスに、ということなのでしょう。

庭とガーデニング、欲しいのはどっち？

ここで、日本の庭について考えます。

たとえば京都の大徳寺は、広大な庭の一部に４畳半ぐらいの枯山水がつくられています。この枯山水部分は、いわば庭の中の部屋という感じです。竜安寺の石庭も、塀で囲われた落ち着いたたたずまいで、外の一室という雰囲気をもっています。

この時代から、日本人にとって囲われた庭というのは、完全な戸外ではなく、「外の部屋」という意味合いだったのだと思います。

塀をつくって囲い、家の中に対して、外に部屋をもうひとつつくること。そういった「外の部屋」をつくるという感覚で、日本人は昔からずっと庭をつくってきたのです。

対して「ガーデニング」とは、囲うべき庭がなくなって、建物の本体だけになってしまったところで、建物のまわりを装飾すること。道を通る人の目を楽しませるため、街をきれいにするため、自分の家の周囲をデコレーションすること。そのための造園デザインを、私は「ガーデニング」と定義しています。

ですから、庭をつくりたいと思っている方は、「庭」を希望するのか、「ガーデニング」を希望するのか、そのあたりの見極めをきちんとしなければなりません。そうでないと、花も木もきれいに植わったけれど、外から見られていて居心地が悪く、庭の生活を楽しめない…といったことにもなりかねないのです。

狭いからと諦めず、庭づくりを工夫して快適に

さて、狭いからということで、塀でなく見通しのいいフェンスを選択した最近の住宅は、塀で囲う「庭」を捨ててしまいました。しかし「庭付き一戸建て」は日本人の長年の夢だったはず。郷愁の「庭」を諦めてしまって、本当にいいのでしょうか。

いや諦めちゃいけない、ということで、考えたのが「インナーテラスガーデン」と、「囲いの建築」シリーズでした。中途半端なフェンスはやめて、建物の外壁自体を塀にして、その中に庭をつくることを思いつきました。要するに、家の中に庭を取り込む住宅です。

あるいは、２階までの高さのある半透明なポリカーボネートなどの塀で、敷地全体を大胆に囲ってしまう。こうすれば、光は入っても視線は入らないので、建物を思いっきり開放的にして戸外とつなげることもできるし、裸で庭に出ることだってできます。

いずれにしろ、しっかりとした「塀」をつくり、外からの視線を遮断したうえで、家と庭をつなげるのです。こうすれば、人の視線を気にしながら暮らすこともなくなり、家に居ながらにして、おおらかに戸外の開放感を味わうことができます。

こういったインナーテラスガーデンや屋上庭園、周囲に高い塀をめぐらせるプライベートシェルターなどの提案は、次号から具体例とともにご紹介していきたいと思います。

狭い土地だからと庭づくりを放棄するのでなく、狭い土地だからこそ庭づくりに知恵を使いたいもの。そして、ちょっと工夫することで、どんな条件の家でも快適な庭を楽しめるのです。

勝田 無一（かつた・むいち）
建築家・造園家

1951 年 静岡県出身。
1974 年 東洋大学工学部建築学科卒業。
1983 年（有）創設計設立、代表。
住宅・マンション・施設店舗の設計から、造園・ガーデンデザインの設計まで、「庭と家作り」をテーマにした作品で評価を得る。08 年には銅板植木鉢のオブジェ作家としても活動開始。作詩家でもあるなど幅広く活躍。著書「私の設計顛末記」創設計、「人気ガーデナーのガーデンデザイン」世界文化社、住宅雑誌等掲載多数。

次回から３回にわたり、勝田無一のガーデン講座・実践編をお送りします。次回は「インナーテラスガーデン」のアイデアが満載。お楽しみに！